



皆川 悟

1995年生まれ 感受性豊かなひょうきん者。自分の心のバランスを保つように始めた紐編みは、中学生の頃からだそうだ。“紐を編んでると落ち着くんだ”とイヤホンで好きな音楽を聴きながら編んでいる。一編み一編みに深いこだわりがあり、また大きく二つの組に分ける。

柴田 錢一

1970年生まれ 柴田さんにとっては、もはや描く行為自体が気持ちの良いこと、そして落ち着かない時に自らを安定させるものとなった。永遠の謎である“せっけんのせ”を描き続ける在籍20年を超えたベテランは、海外での初個展でも作品を完売させた。そんな快挙にも本人はどこ吹く風、至ってマイペース。皆から人気者。

齋藤 裕一

1983年生まれ 描いているのは楽しみにしているテレビ番組名を自ら省略したもの。文字の集積。制作のスピードは速く、調子が良いと鼻歌混じりにものの数分で仕上げていく。入所当時は落ち着かず動き回り、1分たりとも席に座っていられなかったが、今では休憩時間や仕事前から制作するほど精力的に向き合っている。

宮川 佑理子

1987年生まれ 佑理子さんは身体を動かすことが大好き。絵を描くことも好き。「ぐーるぐーる」と口ずさみながら、大きな紙に絵の具を手のひらでのばして描いていく。赤い色を好んで使い、生命を感じる力強い画面が生まれる。

野田 夢友

1985-2017年 画材は主にクレヨン。食堂でのんびりする→アトリエで画材を準備して描く→ある程度描くと画材をしまい、また食堂へ戻る。この流れを繰り返していくことで何度も色が塗り重ねられた絵は、色が混じり合い、深くなり、クレヨンとは思えないような色彩を生み出していく。

杉浦 篤

1970年生まれ 自分の気に入った写真を何年も触り続けた物が色々な形となり、一つの作品となっている。篤さんは生活中で、ホッと一息出来る夕食後の時間やのんびりと穏やかなひと時に自分の部屋で楽しそうに写真を見ている。篤さんにとって写真と向き合うひと時は安心出来る大切な時間なのだろう。

大内 健太

1984年生まれ 「俺は、絵が描きたいんだ!」と言わんばかりのものすごい迫力で、全身運動のように身体ごと動かして描く。紙がずれても、クレヨンが折れてもそんなこと構わない。でも勢いだけで描いているのではない。笑いながら「さらさら」優しく、そおと「ぐるぐる」回して…いろいろな彼の気持ちが込められている。

金森 啓太

1994年生まれ 人と話すのが好き。仲間や職員、近所の人とたくさんおしゃべりをする。作品を描く時にも「今日は何かくの?」と周りとの会話を一通り楽しんでから描き始める。会話の中から描くものを決めているようである。「今日は○○を描いてみる」と決まると、笑顔から一変して真剣なまなざしで作品へと向かい始める。

成宮 咲来

1984年生まれ 『さくらハート』。名前の通り、彼女の想いがぎゅっと詰まっている作品。手のひらや指先を上手に使い、毎回握る力や方法が違う。だからいろいろな形の『さくらハート』が生まれる。仕事を通していろんな場面で更なる力を發揮出来る様になった。彼女を中心に、たくさんの人が笑顔になった。

○ 次回展覧会のお知らせ 2018年7月10日(火)-11月25日(日)「新しい潮流 New Current」○

「もうひとつの美術館」は、栃木県那珂川町の里山に建つ明治大正の面影を残す旧小口小学校の校舎を再利用して2001年に開設された小さな美術館です。ハンディキャップを持つ人の芸術活動をサポートしながら、[みんながアーティスト、すべてはアート]をコンセプトに、年齢・国籍・障害の有無・専門家であるなしを超えて、アートを核に地域・場所や領域をつないでいく活動を行っています。春夏秋の年2-3回の企画展を中心に、様々なイベント・ワークショップを開催しています。

もうひとつの美術館は、NPO法人として自主企画・運営を行っており、建物の維持・管理を含め、会員の会費・寄付・入館料によって支えられています。

会員、ご寄付いただける法人・個人、ボランティアなどのサポーターを募集しています。

2013年1月より、もうひとつの美術館は認定NPO法人として認定され、ご寄付いたゞくと「特定寄付金」としての寄付金控除を受けることができます。

●ゆうちょ銀行 記号番号 00160-9-535731 ●加入者名 もうひとつの美術館



右側の建物(明治36年竣工)の屋根は、平成26年度日本郵便の年賀寄附金の助成を受けて改修しました。

鶴岡 一義

1980年生まれ 木材をノコギリで切る、ペンキで色を塗る、ポスカやマッキーで○(まる)を描く。近頃ペンの太さに変化をつけて使うようになり、作品のサイズによって変化ができる。ポスカとマッキーを本人のその時の気分で使っているが、同じ○を描いた作品でも雰囲気が違う世界が見える。単純に見えるようで奥深い○。

野口 敏久

1971年生まれ 「えへへ」「イッヒヒ」実に楽しそうに、笑い声が聴こえて来る。背中を丸めて、1つ1つゆっくりとてんてんを落していく。1つのところにじ~っとポスカを溜めて、次は作品ごと持ち上げてインクを垂らして、模様を創り出す。「てんてん」と線のハーモニーが、綺麗であり飛び出してきそうな錯覚に陥る。

長沢 秀之

1947年生まれ 武蔵野美術大学造形学部産業デザイン科(現・工芸工業デザイン学科)卒大学紛争の間、映画制作やそこから始まった絵の制作に励み、それが現在の制作活動の原点となっている。近作では、記念写真などをもとにした図に、細かい絵の具のタッチを重ね、過去、現在、未来の時間を同質のものとしてとらえる試みを続けている。

秋山 俊也

1986年生まれ 絵画修復家の父の影響で、2歳の頃より絵を描き始める。2010年に続いての出展であるが、膨大な数の「電信柱」は「ひと」のようでもあり、また、うごめく「生き物」のようでもあり、更にエネルギーになっている。

西澤 彰

1969年生まれ かつて近所にあった館林飛行場へ毎日のように通い、離着陸するセスナ機を見ていた。飛行場がなくなった後も、彼は記憶でセスナ機をいろいろな角度からきわめてリアルに描き続け、「飛行機の絵」はいつしか膨大な数となった。

臼井 明夫

1939年生まれ 彼の1日は、午前2時半頃から始まる。まず制作の机の周りの床にティッシュを細かく千切って蟻の行列の様に並べる。そして机に向かい、午前中、ひたすら「花」を描き続ける。午後は散歩に出かけ、花達を愛でたりスケッチしたり。そして夜7時には夢の中。これが「花」を描いていた頃の日常だ。

関連イベント

妻木律子ダンスワークショップ “踊って発見、もうひとりの自分”

日時: 5月19日(土) 13:30 - 15:30

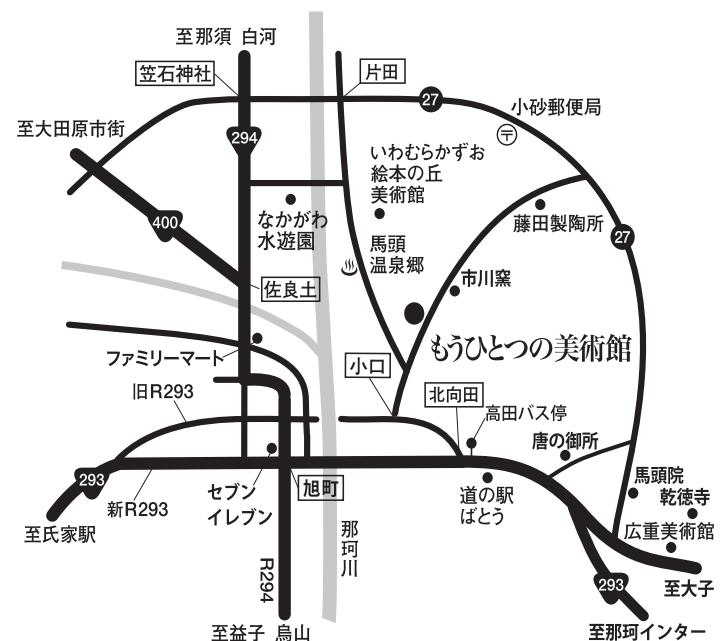
参加料: 大人1,000円+当日入場料(1割引) / 子供500円+当日入場料(1割引)

講師: 妻木律子 <http://www.tsumaki-ritsuko.org/>

*上履き持参してください。

*いただいた個人情報は、本事業に関するご連絡以外には使用いたしません。

*イベントの申込み・お問合せはもうひとつの美術館(0287-92-8088)まで。



●交通

JR東北本線氏家駅から東野バス馬頭行き「高田」下車徒歩25分、道の駅ばとうからタクシーで5分 | JR烏山線烏山駅から那珂川町コミュニティバス馬頭烏山線「道の駅ばとう」下車、道の駅ばとうからタクシーで5分

東北自動車道「宇都宮」ICより60分、「矢板」ICより50分

常磐自動車道「那珂」ICより60分

もうひとつの美術館

M O B museum of Alternative Art, Nakagawa
〒324-0618 栃木県那須郡那珂川町小口1181-2 | mob@nactv.ne.jp